

絵画の中のはきもの

父の居た場所

見 — 眞理子

ものをつくる現場は、どんな業種でも独特の緊張感とワクワク感が混じり合った魅力的な空間だと感じます。父の仕事場にも五感をくすぐる要素がいっぱい詰まっています、いろいろな角度から作品を描いて来ました。しかしそれはあくまでも絵描き目線、「靴屋を継ぐ」という選択肢は私の中に存在しませんでした。道具の一部のように固くなった太ももを自慢する父を見て、女性の私には無理な仕事だと思っていました。最近では女性の職人さんたちがカッコよく個性溢れる仕事をされていて「ああ、こういう道もあったのかなあ…」と靴作りが可能だった環境を惜しむ気持ちになります。父がリタイアしてからずっと物置同然となっていた店舗に機械や道具たちは息をひそめ、人との繋がりまでも封じ込めてしまったように感じていました。

そのスペースが今年の春、形を変えて甥に引き継がれることになりました。屋号の『ミイチ靴店』から『ミイチ珈琲店』へと変わり、父へのオマージュを込めて名付けたこの場所はカフェとして再び街へと扉を開けることになりました。改築中は昔のお客様から懐かしいお電話があったり、道行く方たちから声を掛けていただいたり、『ミイチ靴店』時代の関係が再び息を吹き返したようです。

不思議なことに父が使っていたグラインダーの排気口にはそのままコーヒー豆の焙煎機のダクトがびったりと納まりました。

そして、ギャラリーとして展示できる壁には、『父の居た場所』と名付けた作品がこれもまたずっと前からここにあったように落ち着きました。この作品は父の一周忌に銀座で開いた個展のために描いたものです。

「この日」を予測していたような出来事、これを“シンクロシティ”というのでしょうか。「俺を忘れるなよ!!」と父が仕組んだ計画(?)だったのかも知れません。

皮革の匂いと金槌の音が響いたこの仕事場が、今度はコーヒーの香りと心地良い音楽に包まれた憩いの場所になります。木型や道具たちにも再登場してもらい、“靴屋”だった空気感をエッセンスに加えた珈琲店にできればと思っています。



開店準備中のカフェ店内